

## Culture Shock

阿岸 鉄三\*

読者のなかにも culture shock を経験された人は多くいると思われる。筆者は、60 有余年の人生で、大きな culture shock と自覚したことが、2 回ある。最初は、1965 年に初めて米国へ留学したときで、Atlanta で留学生生活を始めてしばらくは、見るもの、聞くものが珍しく、日常生活・研究室設備における彼我のギャップに驚き、こんな国と戦争を起こして勝つつもりだったのだろうかとの疑問にさえ思ったものである。

2 回目は、現在も進行中である。筆者は、数年前から外気功に関心をもっている。一般的に言えば、手掌を被験者の両側頭部にかざすと、被験者に、体温上昇・筋痙攣・脱力・上半身の回旋運動などの肉体的、あるいは気怠い感じ・安らかな気持ちなどの精神的な反応（感応）が起きるのである。筆者は、数百例の自験例からこの事象の存在を信じるというよりは、経験的に識っているのだが、筆者のこれまで得てきた、そして本誌の読者のおそらくは 99.9 % が備えている近代西洋科学を基盤とする西洋医学的知識・判断能力からはまったく受け入れられないことなのである。

外気功とは、何なのか、どのように理解したらよいのかに興味をもち、多くは孫引き的に関連する資料を読み漁りつつある。内容的には十分理解できないものも多数あるが、そこで、culture shock なのである。結論を述べると、

---

\* 東京女子医科大学腎臓病総合医療センター

われわれは、近代西洋科学を唯一無二の絶対的価値判断基準としてなんの疑いももってこなかったのであるが、1970年代から起こってきた、いわゆるニューサイエンスの立場からすると、Newton, Descartes に始まる近代西洋科学は one of them の判断基準に過ぎないというのである。Newton の万有引力という現象の存在は知られているが、どうしてという発生原因については未解決のままである。Descartes の心身分離論は、実地臨床には受け入れ難い。

通常、科学的であるとは、普遍性/再現性/客観性を備えていることといわれるが、医学では、これらを備えないことがしばしば起きる。しかし、われわれは現代医学は、科学的であると信じて疑わない。それは、近代西洋科学のパラダイムのなかでの妥当性/整合性に過ぎないことを自覚しなければならないというのである。所詮は、Tart のいう状態特定の科学 (state-specific science) なのである。

21世紀の医療は、われわれが20世紀に陥った物質文明の先走りとしての近代的西洋医学型ではなく、多くのstateに対応できる広い視野をもった、全体医療 (holistic medicine) を指向するものになるべきであろうというのが、culture shock を受けた筆者の現時点での認識 (tentative recognition) なのである。